新　刊

□佐藤　謙：**北海道高山植生誌**　i-xv＋688 pp．2007．￥21,000（税込）．北海道大学出版会．ISBN: 978-4-8329-8173-7.

著者が35年間の歳月をかけ，脚で調べ上げた労作である．北海道の山岳を少しでも知るものならば，このような書物を編むためにはどれほどの体力と気力，そして財力が必要か想像できるだろう．なお，「高山植生誌」とあるが，高山だけではなく，低地の超塩基性岩地や海岸植生，風穴の植生なども網羅されており，夥しい量の常在度表が含まれている，貴重なデータ集でもある．北海道の植物相と植生に関心をもつものにとって，実にありがたい書物が出版されたものである．

内容を簡単に紹介しよう．本書は大きく四部に分かれている．第Ⅰ部は著者の手になる生態写真である．各山系ごとに紹介されているが，図鑑などには見られない，植物の生育環境の窺える写真が掲載されているのが嬉しい．単なる風景写真にとどまらない，植物の「生活の場」（山崎　1959）が見て取れる写真の数々である．第Ⅱ部は総論と称し，植物相と植生の両者を同時に扱う，著者独自のスタンスである，植物生態地理学 Geobotany を標榜している．第Ⅲ部は各論であり，本書の基盤である，北海道主要四山系の植生データがぎっしりと詰め込まれている．ここでいう主要四山系とは，大雪山系，知床山系，日高山系，夕張山系の四つである．このパートでは，上述の主要四山系ばかりではなく，北海道全体の高山も漏れなく取り上げられている．また，「低標高の特殊な立地に成立する高山植物群落」として，礼文島，超塩基性岩地，石灰岩地，硫気孔原，海岸風衝地，風穴の植生がカバーされている．第Ⅳ部は考察と結論のパートで，高山植生とその立地環境，そして植生の構成要素である各植物の分布型との関連について論議がなされている．

第Ⅱ部では崕山固有のキリギシソウが取り上げられている．これは札幌在住の植物写真家である梅澤　俊氏と著者が発見し，著者と伊藤浩司氏（北海道大学名誉教授）が記載・発表したものであるので，とくに思い入れが深い植物なのだろう．極東アジアのキタダケソウ属は特殊な基岩に結びついた，典型的な遺存固有の植物とみなされることが多い．しかし，著者はキリギシソウは石灰岩地の遺存固有の植物だが，ヒダカソウはカンラン岩地で分化した新固有の植物とみなすことができるとしている．第Ⅳ部で触れられている，本州中部山岳における日本海側地域（飛騨山脈）と太平洋側地域（赤石山脈－本書，木曽山脈，八ケ岳，御岳－門田追加）の群落対比は，大雪山系と日高山系との対比によく似ているという指摘は多いに首肯ける．

本文の膨大な植生データの他，文献や植物名索引も充実している．とくに植物名索引では分布型や常在度表における出現箇所も明示してあり，重宝する．ただ，植物和名の索引にも学名が併記されているので，和名か学名のどちらかを分類順（例えば新エングラー方式など）に並べていただければさらに使い易いものになっただろう．　　　　（門田裕一）